古筆切・古文書のAMS^{14}C年代測定

── 平安・鎌倉時代の古筆切を中心に ──

小田寛貴[1)]，池田和臣[2)]，増田 孝[3)]

1）名古屋大学年代測定総合研究センター
〒464-8602　名古屋市千種区不老町　Tel:052-789-2579，Fax:052-789-3092
2）中央大学文学部
〒192-0351　東京都八王子市東中野 742-1　Tel:0426-74-3815
3）愛知文教大学
〒485-0802　愛知県小牧市大草年上坂 5969-3　Tel:0568-78-2211

＜はじめに＞

古典文学の研究にとっての不可欠な基礎研究に，本文整定がある．江戸時代初期には文学作品が版本という形で出版され始まるが，それより以前は，書写による写本で継がれるのが一般的であった．そのため，書写の際の不注意による誤写や意図的な書き改めなどによって，本文は変化してゆく．書写がくり返されるほど，本文は作者の手になる原典から離れていく．そのような本文を，作者の原典に近づける研究，あるいは，本文の変容の過程そのものをあとづける研究，それが本文整定の研究だといえる．

本文整定のためは，誤写や改竄などの少ない，より作者の書いた原典に近い時代の，より古い時代の写本が必要となる．しかしながら，古い時代の写本は，存在そのものが稀少である．特に，平安時代の作品は，平安時代末までに書写された写本がほとんど残っていない．鎌倉時代に書写された写本すら稀少な存在となっているのが現状である．

しかし，古筆切というものがあり，本文研究上大きな意味をもつ場合がある．平安時代や鎌倉時代に和歌や物語を書写した本は，古く美しく稀少な筆跡によって書かれている．それゆえに，お茶会の折に掛け軸として鑑賞するために，あるいは古筆手鑑という古筆切のアルバム帖として鑑賞するために，室町時代以降から写本の一丁一丁を切断し，さらにはその一丁の表裏をひき剥ぐということがなされてきた．つまり，古い写本は完本としては稀であっても，一葉一葉の断簡としては少なからぬ量が今日にまで伝来しているということになる．これら断簡を古筆切というが，これらを集めることによって，原典により近い古い時代の本文の姿を研究することができるのである．

古筆切には極札というものが付いている．古筆鑑定家によって誰が書いたものかを認定したものである．しかし，古いものほどその根拠は弱く，古く平安時代に書写された古筆切や，例えば藤原定家・西行・紀貫之といった文学史上有名な人物が書いたとされる古筆切には，後代の模写（写し）や，それらが高価な値段で取り引きされるために悪意で捏造された偽物が多く含まれている．

それゆえ，古筆切を古典文学の本文研究として使うに際しては，古筆切の書写された年代を明らかにし，後代の模写や偽物を取り除く必要がある．

古文書・古筆切などの書写年代は，書風・字形・筆勢・墨色・料紙，および奥書・内容などによって判定することができる．しかし，それでも書写年代が明確に決定できないような場合，加速器質量分析法（AMS：Accelerator Mass Spectrometry）という自然科学的な手法によって得られる ^{14}C年代というものが，古筆切の書写年代を推定する上で有益な情報になると考えられる．

しかしながら，古文書・古経典・古筆切などの和紙資料に ^{14}C年代測定法を適用した系統的な研究は，始まって十年程度のまだ間のないものである．それゆえ，年代の未詳である資料についての測定が求められる一方で，書風や奥書などにもとづき年代の判明している資料の測定例を蓄積していくことで，AMS ^{14}C年代測定の正確度と限界とを確認しつつ，その有効性を明らかにしていく必要がある．

そこで，本研究では，以下の二つの目的をもってAMS ^{14}C年代測定を行った．第一には，^{14}C年代測定の古筆切資料に対する正確度・有効性を確かめることを目的に，歴史学的に書写年代が判明している古写経などの和紙資料についての測定を行った．第二には，年代未詳の古筆切資料，年代に関して異論のある資料，あるいは後代の模写や偽者の疑いがある資料，これら古筆切の書写年代を明らかにすることを目的として，AMS ^{14}C年代測定を行った．

本稿においては，これまでに測定されている古文書・古筆切資料の詳細とAMSにより得られた ^{14}C年代を以下に報告する．

＜１．中尊寺紺紙金銀交書一切経断簡＞

「中尊寺紺紙金銀交書一切経」は，大治元年（1126年）の中尊寺金色堂落慶供養のために，藤原清衡（1056～1128年）が発願した願経であり，永久五年（1117年）頃から天治二年（1125年）頃にかけて書写されたものである．

^{14}C年代測定の結果を表１に示した．六回の測定結果の平均値は，935±14[BP]となった．この１σの範囲を暦年代に較正した結果が，1036(1041)1065, 1084(1094, 1117)1123, 1137(1141)1144, 1147(1153)1157[cal AD]である．２σの誤差範囲を較正した値も，1028(1041, 1094, 1117, 1141, 1153)1160[cal AD]であり，11世紀中ばから12世紀中ばごろとの結果である．較正曲線が横ばいになっている期間にあたるため，較正年代の誤差範囲は ^{14}C年代の誤差に比べて広くなっているが，永久五年（1117年）から天治二年（1125年）の頃とする歴史学的な年代と一致する結果であることがわかる．

表１．中尊寺紺紙金銀交書一切経断簡のAMS ^{14}C年代

測定回数	^{14}C年代 [BP]	較正年代 [cal AD]
1	942±29	1027(1039)1069, 1080(1103, 1115)1126, 1136(1142, 1151)1158
2	971±32	1021(1028)1041, 1095()1117, 1141()1152
3	948±37	1023(1038)1071, 1079()1129, 1136(1143, 1149)1158
4	890±30	1045()1049, 1056()1087, 1121()1138, 1156(1161)1193, 1198()1209
5	929±40	1028(1043, 1091, 1120, 1139, 1155)1162
6	932±34	1030(1042, 1092, 1118, 1140, 1154)1160
av. ±1σ	935±14	1036(1041)1065, 1084(1094, 1117)1123, 1137(1141)1144, 1147(1153)1157
±2σ	±28	1028(1041, 1094, 1117, 1141, 1153)1160

＜２．仏書紙背仮名消息＞

この「仏書紙背仮名消息」は，次に報告する「因明問答抄」と同時に入手したものである．それゆえ，因明問答抄のツレであろうかとも推測された．仮にそうであるとするならば，この仮名消息の年代も，因明問答抄と同じく正和四年（1315年）頃ということになる．

しかしながら，仮名消息の筆勢・字体にみられる特有な鋭さから判断すると，その年代はむしろ平安時代末期から鎌倉時代初期という時期に求められる．

この平安末期から鎌倉初期という仮名消息の年代は，『思文閣古書資料目録　第106号』（1982年7月）に掲載されている「飛鳥井雅経　鎌倉時代高山寺文書紙背消息　正治二年十月八日民部卿殿宛」という別の資料からも支持されるものである．この高山寺文書紙背消息の表の文書は，仏書紙背仮名消息の仏書とまったく同筆のものであり，同時期に書写されたツレであると判断することができる．そして，この高山寺文書の書写年代が1200年ごろに求められるのである．すなわち，紙背文書である飛鳥井雅経（1170～1221年）筆の消息には，正治二年（1200年）10月8日という年号日付が記されているため，高山寺朱印の押された表の文書は，それよりも少し後に書かれたものであるということになる．したがって，仏書紙背仮名消息の書かれた年代も，およそ1200年頃，つまり平安末期から鎌倉初期という時期に求めることができるのである．

^{14}C年代測定の結果を表２に示した．較正年代は12世紀後半から13世紀後半を示しており，仮名消息の書風や高野山文書から求められる平安末期～鎌倉初期という時期に相当する年代である．

表２．仏書紙背仮名消息のＡＭＳ^{14}Ｃ年代

測定回数	^{14}C年代［BP］	較正年代［cal AD］
1	820±38	1192()1200, 1208(1221)1263
2	864±31	1160(1191, 1202, 1207)1218
3	845±25	1164()1168, 1187(1214)1222
av. ±1σ	843±18	1189()1203, 1206(1215)1221
±2σ	±37	1162(1215)1257

＜３．因明問答抄＞

「因明問答抄」．この資料に用いられている料紙は楮紙であり，紙高は30.1cm，紙幅は46.9cmである．仏書の書写された面には雲母砂子が引かれている．裏面の仮名消息は，「かはるしるしの御よろこひとかのつきせす候はんするめてたさに候」と記されていることから，年賀状であると考えられる．また，「御いのり心しつかにつとめて候」とあることから判断すると，僧からの消息のようである．この資料は，田中塊堂『日本写経綜鑒』（思文閣出版，1974年刊）所載の「因明問答抄」のツレである．その561頁に掲載されている写真版に照らして，「有」「也」「云々」「秘記」などの字形が全く同一であり，紙背に仮名消息があり，かつ天に二条，地に一条の墨界を施すところも同じためである．『日本写経綜鑒』によれば，この資料は，信懐が正和四年（1315年）に書写校合したものであるという．反古

（古手紙）の紙背を利用したものであるから，その料紙の年代は正和四年よりも，少しさかのぼることになる．

^{14}C年代測定の結果を表３に示した．較正年代は，1300 年前後もしくは 14 世紀中～後期という値であり，正和四年（1315 年）よりも少し前という歴史学的な年代と一致する結果を示している．

表３．因明問答抄のＡＭＳ^{14}Ｃ年代

測定回数	^{14}C年代［BP］	較正年代［cal AD］
1	667±52	1284(1298)1321, 1351()1389
2	649±28	1296(1301)1316, 1353(1372, 1379)1388
3	653±32	1294(1300)1316, 1353(1373, 1377)1388
av. ±1σ	656±22	1295(1300)1304, 1367(1374, 1376)1384
±2σ	±45	1288(1300)1326, 1348(1374, 1376)1391

＜４．中院宣胤筆奥書切＞

紙高 23.4cm，紙幅 13cm の楮紙に書かれた「中院宣胤筆奥書切」は，何かの写本の奥書の部分である．60 歳の中院宣胤が，文亀元年（1501 年）に記した現物と判断できる．その根拠は，筆勢・墨色に不自然さがなく，花押も確かであること，また，記された文言の中に「亀寿の所望に依って禿筆を染めた」とあるが，宣胤の日記『宣胤卿記』（臨川書店，1965 年刊）の文亀二年（1502 年）４月 27 日，28 日，29 日，５月１日の条に，「亀寿丸」という人物が出ていて，この奥書の内容にも疑うべきところがないことである．表４に示した^{14}Ｃ年代測定の結果でも，その較正年代は，文亀元年（1501 年）と一致する結果を示している．

表４．中院宣胤筆奥書切のＡＭＳ^{14}Ｃ年代

測定回数	^{14}C年代［BP］	較正年代［cal AD］
1	303±41	1517(1534, 1537)1596, 1619(1637)1648
2	417±27	1441(1449)1478
3	325±26	1495()1498, 1514(1524, 1562)1600, 1615(1629)1638
av. ±1σ	348±18	1487(1516)1523, 1567(1598, 1617)1627
±2σ	±37	1477(1516)1531, 1543(1598, 1617)1635

＜５．伝藤原行成筆佚名本朝佳句切＞

藤原行成（971～1027 年）は，平安時代の能筆であり，小野道風・藤原佐理とともに三蹟の一人として知られている．

20 年ほど前に紹介されたこの「伝藤原行成筆佚名本朝佳句切」は，書風・書体・筆致などが寛仁二年（1018 年）の藤原行成真跡「白氏詩巻」（東京国立博物館蔵）のそれと共通することから，同時期の行成真筆であるとされている（小松茂美『日本の書３　三跡』中央公論社，1981 年刊）．また，この古筆切は飛雲紙とよばれる料紙に書かれており，この点からも平安時代のものと判定することができる．

飛雲紙とは，藍によって染色された繊維が料紙の中に部分的に配されており，茜雲が空に浮かんでいるようにみえる装飾料紙である．現存する飛雲紙としては，「深窓秘抄」や「堤中納言集（名家家集切）」などが最古の例として知られており，いずれも 11 世紀半ばに成立したものである．これら原初的な飛雲紙は，後世のものに比べると大きな飛雲が漉き込まれているのが特徴である．「元暦校本万葉集（難波切）」など 11 世紀末のものになると，飛雲は小型化し，12 世紀初頭の「烏丸切後撰和歌集」などではさらに小型化し形骸化している（四辻秀紀『彩られた紙 料紙装飾』，徳川美術館，220-229，2001 年）．飛雲紙は，このように 11 世紀半ばから 12 世紀初頭にかけて特異的に使用されたものであり，後世にはその使用例を見出すことはできない料紙である．この佚名本朝佳句切にも大型の飛雲が漉かれており，11 世紀半ばの飛雲紙と共通している．

表５．伝藤原行成筆佚名本朝佳句切のＡＭＳ^{14}Ｃ年代

測定回数	^{14}Ｃ年代［BP］	較正年代［cal AD］
1	1071±34	902()916, 963(984)1002, 1012()1016
2	1109±36	893(902, 917, 962)984
3	1133±36	887(896, 923, 940)978
av. ±1σ	1104±20	897(903, 916)922, 943(964, 972, 975)982
±2σ	±41	891(903, 916, 964, 972, 975)995

表５に示したとおり，^{14}Ｃ年代測定によって得られた結果は 1104±20[BP]であった．これは較正年代に換算すると，897(903, 916)922, 943(964, 972, 975)982[cal AD]となる．10 世紀初頭もしくは 10 世紀後半との結果である．２σの誤差範囲で暦年代較正を行っても，891(903, 916, 964, 972, 975)995[cal AD]という結果である．較正曲線が横ばいになっている時期であるため誤差範囲が大きいが，^{14}Ｃ年代測定の結果は，10 世紀末から 11 世紀初頭の行成の筆とする書跡史学的な見解と一致するといってよいであろう．また，これは同時に，10 世紀末ないし 11 世紀初頭の飛雲紙の存在を示す結果であり，飛雲紙の原初的なものの出現がこの時期にまでさかのぼる可能性が示されたことになる．

ただし，^{14}Ｃ年代測定のみからは，藤原行成の真筆であるかという点までは結論づけることはできないし，また，天禄三年（972 年）生まれの行成よりも早い時期の能筆の手になるものである可能性も否定できない．この佚名本朝佳句切の書風は和様の典型というべきものであるが，行成より前で和様の能書として名高かった人に，兼明親王（914～987 年）がいる．行成の日記「権記」には，行成が兼明親王の書を臨模していたことが記されている（寛弘八年十一月二十日の記事）．兼明親王の書は行成の手本であったのであり，行成の書風に近かったと考えられる．年代測定の結果は，行成ではなくこの兼明

親王の書であると考えることとも矛盾はしない．兼明親王か，藤原行成か，あるいはそれらの周辺にいた他の能書の誰かか，そのいずれにせよ，年代測定によって佚名本朝佳句切の書写年代は，行成よりも後という可能性はなくなったといってよい．

＜６．伝藤原定家筆小記録切＞

この「伝藤原定家筆小記録切」は，九葉の小記録切が一巻の巻子にされたものである．九葉はそれぞれに書かれている内容から判断して，二葉のツレと七葉のツレの二種類に分けることができる．二葉のツレに書かれている漢文は，「禁秘抄」からの抜き書きであり，余白にひらがなで書かれているメモのようなものは，「新古今集」に見える歌（「しくれの雨まなくしふれは真木の葉もあらそひかねて色つきにけり」）の一部分である．七葉のツレに書かれている漢文は，残念ながらその出典を明らかにすることができない．しかし，そこに記されている「秉節校尉」「通訓大夫」「幼学」「経筵」「春秋館」「別提」「崇禄大夫」「朝奉大夫」「中直大夫」などは，韓国の高麗時代（918～1392 年），朝鮮時代（1392～1910 年）の官職名である．また，余白にひらがなで書かれているのは，「伊勢物語」の本文の抜き書きと簡略な注と思われる．

藤原定家（1162～1241 年）自筆の「伊勢物語」の本文や注ということになれば，大変貴重な資料の発見ということになるが，定家筆といわれる古筆切には，多くの写し（模写本）や偽物が含まれている．そこで，七葉のツレの方の一葉について，^{14}C 年代測定を行った．表６に測定結果を示す．較正年代は，13 世紀後半もしくは 14 世紀後半との結果が得られた．定家は仁治二年（1241 年）に亡くなっているので，定家の自筆とするには，やや新しい年代であろう．

また，この資料には別の問題が認められる．すなわち，そこに記されている韓国の官職名のなかには，朝鮮時代になってから設置されたと考えられているもの（「別提」「朝奉大夫」「中直大夫」など）が含まれているのである．これらが定家の活躍した 13 世紀前半には既に存在していた可能性を考えることもできるが，定家の自筆ではなく，定家流の筆跡を使いこなす後世の人が書いたものと考えるほうが自然であろう．いずれにせよ，鎌倉～室町期の日本の文献資料のなかに，韓国の高麗時代史にかかわるものが見いだされたことは，非常に珍しいことである．今後，韓国史の問題として掘り下げられることを期待したい．

表６．伝藤原定家筆小記録切のＡＭＳ^{14}Ｃ年代

測定回数	^{14}C 年代［BP］	較正年代［cal AD］
1	710±39	1278(1287)1298
2	718±35	1277(1285)1296
3	670±30	1289(1297)1303, 1369()1382
4	625±30	1299(1305)1329, 1344(1365)1374, 1376(1386)1395
5	686±36	1283(1294)1301, 1372()1379
6	702±33	1281(1289)1298
av. ±1σ	685±14	1289(1295)1298
±2σ	±28	1284(1295)1301, 1371()1379

＜７．伝藤原定家筆古今集抜書切＞

この「伝藤原定家筆古今集」も，先の資料と同様に藤原定家（1162～1241 年）筆と極められた，古今和歌集の恋歌ばかりを抜き書いた古筆切である．料紙は楮紙であり，縦幅は 18.0cm，横幅は 12.2cm である．天に二条，地に一条の墨界が引かれている．真正な物であるなら，細身の筆線から判断して定家の若い頃の筆跡に近く，1200 年頃の書ということになる．

しかしながら，定家筆とするには不自然なところ，すなわち「連（れ）」「遣（け）」等の文字のくずし方が，定家真蹟とされているもののくずし方とは異なるという疑問点があった．定家筆といわれるものには，定家が歌道の上で神格化されたため，後代の偽物や模写がきわめて多いのである．

そこで，この資料について ^{14}C 年代測定を行った（表７）．

表７．伝藤原定家筆古今集抜書切のＡＭＳ^{14}Ｃ年代

測定回数	^{14}C 年代［BP］	較正年代［cal AD］
1	227±55	1642(1660)1676, 1765()1767, 1776()1802, 1939()1946
2	270±26	1638(1645)1665
3	225±33	1649(1661)1670, 1780()1797
av. ±1σ	240±23	1647(1656)1663
±2σ	±46	1640(1656)1670, 1780()1797

^{14}C 年代測定の結果は，240±23[BP]であった．これは，較正年代にして 17 世紀半ば以降というものであり，近世になってからの書写であることを示す結果である．古筆切には写しや偽物が多く含まれているが，ＡＭＳ^{14}Ｃ年代測定によって，こうした後世の書を定家筆とされる史料の中から除くことができた例である．

＜８．伝宗尊親王筆藤原実方家集切＞

この「伝宗尊親王筆藤原実方家集切」は，平安時代の歌人藤原実方（？～998 年）の歌を集めた家集の断簡である．料紙は斐紙，紙高は 24.6cm，紙幅は 13cm であり，雲母砂子が撒かれている．

この古筆切には，「宗尊親王」筆の極札が付されている．宗尊親王（1242～1274 年）と極められる古筆切は，そのほとんどが平安時代の書写にかかる端正典雅な麗筆である．本断簡の書風は，宗尊親王と極められる如意宝集切・十巻本歌合・高野切二種などの雰囲気に通うものがある．また，「も」の音を「ん」で表記する平安時代から鎌倉初期の特徴ももっている．これらの点から，正しい資料であるなら 11 世紀後半に書写されたものと考えられ，実方家集の写本の断簡としては特別に古い，本文価値の非常に高いものになる．

しかしながら，その筆線は少々生硬に感じられ，後代の模写あるいは偽筆である可能性も有する資料であった．

さて，これのツレと思われるものが京都の北村美術館に一葉あり，それについて『古筆学大成』は，11 世紀半ばの書写であり，「実方集」の現存最古の書写本断簡としている．現物を調査させていただいたところ，やはり，測定を行った古筆切と同筆のツレと思われた．箱蓋の裏に「傳宗尊親王御筆　九枚ノ中　（吉沢義則氏花押）」とあり，折紙に「傳宗尊親王御筆　青蓮院切　ほりかはの　（吉沢義則氏花押）」とあった．かつて九葉まとまって伝存していたこと，青蓮院に関わりのあるらしいことが知られた．しかし，書写年代を決定する根拠は得られなかった．

ところが，『冷泉家時雨亭叢書　第 20 巻　平安私家集　７』（朝日新聞社，1999 年刊）の中に平安時代書写の「実方家集」があり，そこに，当該断簡および北村美術館蔵のものと全く同じに書かれた部分が，存在したのであった．つまり，平安時代の書写にかかる原本が，冷泉家に完全な形で存在していたのである．測定を行った古筆切に当たる部分は該書 446 頁（18 丁ウラ）に，北村美術館蔵に当たる部分は 415 頁（３丁オモテ）に掲載されている．ということは，この古筆切も北村美術館蔵のものも，後代の写しであるということになるのである．

そこで，この古筆切についても ^{14}C 年代測定を行った．表８からわかるとおり，^{14}C 年代測定の結果は，202±20[BP]という，較正年代にして 17 世紀半ば以降に相当する値であった．誤差範囲を２σにしたとしても，11 世紀にはさかのぼることはなく，近世以降に書写された資料であることが ^{14}C 年代測定でも示されたのである．

表８．伝宗尊親王筆藤原実方家集切のＡＭＳ^{14}Ｃ年代

測定回数	^{14}C 年代 [BP]	較正年代 [cal AD]
1	227±48	1643(1660)1673, 1777()1800, 1941()1946
2	227±29	1650(1660)1668, 1781()1796
3	151±25	1674(1681)1691, 1728(1734)1777, 1800(1806)1811, 1920(1931)1941, 1946(1947)1948
av. ±1σ	202±20	1661(1667)1673, 1777(1782, 1795)1800, 1942()1946
±2σ	±41	1654(1667)1679, 1740()1753, 1756(1782, 1795)1804, 1935()1947

＜９．伝二条為氏筆散逸物語切＞

「伝二条為氏筆散逸物語切」．この資料は物語の一部分が書写されている古筆切であり，一丁を表裏に剥いだ連続する二葉として伝存している．二葉とも，一面十二行書きであり，料紙は縦 15.8cm・横 15.0cm の楮紙である．「二條家為氏卿」と記した極札が付いている．

この古筆切には登場人物の詠んだ和歌が含まれているので，新編国歌大観を検索してみたが，該当する和歌は存在しなかった．現存平安時代物語には該当するものがないようである．鎌倉時代擬古物語の可能性もあるが，現段階では鎌倉時代物語の調査を完了していないので断言はできないが，現在に伝わらず滅び去ってしまった散逸物語の断簡である可能性が高い．室町時代以降の古写本の解体にともなって，現在に伝わることなく散逸してしまった物語が多く存在していたことがわかっており，その中のひとつであると考えられる．

だが，散逸されてしまったものであるゆえに，内容の面からは年代や作者に関する情報を得ることが難しい．せめて，この断簡の書写された年代がわかれば，いつ頃には成立していた作品なのかが判明する．そこで，^{14}C年代測定を行った（表９）．

結果は，２σの誤差範囲の較正年代にしても 1221～1286[cal AD]である．鎌倉時代中期の年代であり，かなり古い時代の写本の断簡であることが判明した．なお，この年代は極札に記されている二条為氏（1222～1286 年）が歌人として活躍した時代に符合する結果でもある．

平安・鎌倉時代の古写本は極めて稀な存在である．例えば，竹取物語の場合，現存する最古の写本は室町時代末から近世初頭にかけてのものにすぎない．また，数枚しか残っておらず貴重視されている古筆切の断簡も南北朝期頃のものと考えられている．鎌倉時代中期にまでさかのぼるこの古筆切は，それだけで高い本文価値を有するものであり，このことが ^{14}C 年代測定によって明確にされたのである．この物語切のツレが一枚でも多く収集されることで，失われてしまった物語の一部なりともが復元されることが期待される．

表９．伝二条為氏筆散逸物語切のＡＭＳ^{14}C年代

測定回数	^{14}C年代［BP］	較正年代［cal AD］
1	760±55	1221(1276)1289
2	785±31	1221(1261)1278
3	753±25	1262(1278)1283
av. ±1σ	766±23	1258(1275)1280
±2σ	±45	1221(1275)1286

＜10. 伝冷泉為相筆散逸物語切＞

この「伝冷泉為相筆散逸物語切」も，先の伝二条為氏筆の物語切と同じく，現存する平安・鎌倉時代物語に該当するものを見いだせない散逸物語の断片と思われる．極札にある冷泉為相（1263-1328 年）は鎌倉時代の歌人である．また，先の二条為氏の異母弟にあたり，両者が家領の相続をめぐりあらそったことが知られている．しかしながら，この散逸物語の内容については，一葉だけからは研究の糸口を見いだすことができない．そこで，いつ頃に書写されたものなのか，すなわちいつ頃までには成立していた物語なのかを明らかにするため，^{14}C年代測定を行った（表 10）．

測定結果は，較正年代で 1288～1304, 1367～1384[cal AD]である．鎌倉末から南北朝にかけて書写された物語の断簡であることが示された．また，この年代は，歌人としての冷泉為相が活躍した時期を含む結果でもある．

表 10. 伝冷泉為相筆散逸物語切のＡＭＳ^{14}Ｃ年代

測定回数	^{14}C年代 [BP]	較正年代 [cal AD]
1	628±32	1299(1304)1328, 1344(1366, 1385)1394
2	723±32	1277(1284)1294
3	685±39	1283(1295)1302, 1371()1380
4	621±33	1300(1312)1330, 1342(1354)1374, 1376(1387)1396
5	682±35	1284(1295)1301, 1371()1380
6	681±34	1285(1296)1301, 1371()1380
av. ±1σ	670±14	1294(1297)1300, 1372()1378
±2σ	±28	1288(1297)1304, 1367()1384

＜11. 伝平業兼筆春日切＞

春日切は古来より有名な古筆切である．雲母引き料紙に白罫が引かれ，特徴ある筆跡で和歌が書写されている．一冊完全な形で残っているものに「公忠集」があり，また，残欠本としては「九条殿師輔集」（前田育徳会尊経閣文庫蔵）がある．しかし，その他は古筆切の断簡として伝存している．古筆切になっているものには，残欠本「九条殿師輔集」のツレ，そして，今に伝わらない散逸私家集である「花山院御集」の断簡，また，やはり現在散逸してしまっている「小野宮実頼集」末部の断簡，さらに，いかなる作品か判らない未詳家集の断簡がある．現在に伝わらぬ散逸家集「花山院御集」の断簡，「小野宮実頼集」の末部散逸部分の断簡などは，一葉一葉がそれらを復元するための貴重な資料となっている．

この春日切は，平業兼（生没年不詳，鎌倉時代の公卿）筆と古来伝えられている．しかし，完全な形で残っている「公忠集」の奥書には「校合畢／従三位行治部卿平朝臣業兼」とあり，その筆跡が本文の筆跡とは異なっているので，業兼は校合をおこなった人物であって，本文の書写者は業兼の身近にいた別人と考えられている．

奥書によれば，業兼が校合をおこなったのは，業兼が従三位治部卿の地位にあったときであるから，それは元久二年（1205 年）から承元三年（1209 年）までの間ということになる．すなわち，本文が書

写された時期はそれとほぼ同じ頃，あるいはそれより少し前となるはずである．この点を明らかにすべく，近年新たに出現した断簡（「小野宮実頼集」末部散逸部分と思われるが，その書写内容の詳細については別稿にゆずる）を用いて，^{14}C年代測定をおこなった（表 11）．較正年代にして，12 世紀末から 13 世紀半ばに相当する測定結果であった．奥書が書かれたであろう元久二年から承元三年の頃とは，許容できる誤差の範囲にあると認めてよかろう．これまで説かれてきたとおり，春日切は鎌倉時代初期の書写本と考えられる．

表 11．伝平業兼筆春日切のＡＭＳ^{14}Ｃ年代

測定回数	^{14}C年代 [BP]	較正年代 [cal AD]
1	784±37	1220(1261)1279
2	806±34	1215(1225, 1226, 1243)1273
3	836±35	1164()1168, 1186(1217)1257
av. ±1σ	808±20	1217(1224, 1229, 1240)1262
±2σ	±41	1192()1199, 1209(1224, 1229, 1240)1277

＜12．伝俊寛僧都筆三輪切＞

三輪切は，俊寛僧都（1142～1179 年）筆と伝えられる「古今和歌集」の断簡であり，鎌倉時代の書写と考えられている．しかし，鎌倉時代といっても，鎌倉初期と末期ではいささかの径庭がある．少しでも書写年代を限定すべく，^{14}C年代測定をおこなった．ちなみに，三輪切とされている古筆切には数種類があるのだが，ここで用いたものは東京国立博物館蔵（「東京国立博物館図版目録　日本書跡篇　和様Ｉ」の 42）の三輪切と同一筆跡のツレである．測定結果（表 12）は，較正年代にして 14 世紀頃に相当し，鎌倉末期か南北朝期の書写本であることが示された．

表 12．伝俊寛僧都筆三輪切のＡＭＳ^{14}Ｃ年代

測定回数	^{14}C年代 [BP]	較正年代 [cal AD]
1	563±33	1327()1346, 1393(1402)1413
2	643±34	1296(1302)1325, 1349(1370, 1381)1391
3	594±40	1303(1328, 1344)1368, 1383(1394)1405
4	653±30	1295(1300)1315, 1354(1373, 1378)1387
5	698±37	1281(1291)1299, 1374()1376
6	542±37	1331()1340, 1397(1408)1424
av. ±1σ	615±14	1303(1319)1328, 1345(1352)1368, 1383(1389)1394
±2σ	±29	1300(1319)1332, 1339(1352)1373, 1377(1389)1399

＜13. 伝藤原行能筆斎宮女御集断簡＞

斎宮女御徽子（929～985 年）の家集は，歌数および歌の配列順序の相違によって，四系統にわけられている．しかし，新たに，歌の配列順序が四つの系統のいずれとも異なる「斎宮女御集」の断簡が出現した．いままで知られている諸伝本とは異なる別系統の「斎宮女御集」は，いつ頃書写されたものであるか，それを明らかにするべく ^{14}C 年代測定をおこなった（表 13）．測定結果は，較正年代にして 14 世紀頃に相当し，鎌倉末期か南北朝期の書写本であることが示された．

表 13. 伝藤原行能筆斎宮女御集断簡のＡＭＳ ^{14}C 年代

測定回数	^{14}C 年代［BP］	較正年代［cal AD］
1	606±30	1302(1325)1333, 1338(1349)1369, 1382(1391)1399
2	649±32	1295(1301)1319, 1352(1372, 1379)1389
3	691±32	1283(1293)1300, 1374()1377
av. ±1σ	649±18	1297(1301)1304, 1366(1372, 1379)1386
±2σ	±36	1292(1301)1326, 1348(1372, 1379)1391

＜謝辞＞

この研究の一部には、日本学術振興会科学研究費補助金（若手研究（B），課題番号 14780091，研究代表者：小田寛貴）を使用した．記して感謝いたします．

AMS radiocarbon dating of the Kohitsugire fragments and the ancient documents in the Heian-Kamakura period

Oda, H.[1], Ikeda K.[2] and Masuda, T.[3]

1) Center for Chronological Research, Nagoya University, Nagoya 464-8602, Japan
2) Chuo University, Hachioji, Tokyo 192-0351, Japan
3) Aichi Bunkyo University, Komaki, Aichi 485-0802, Japan

Kohitsugire is a paper fragment of an old manuscript written mainly in the Heian-Kamakura period. Although they have significant information for historical, literary and paleographical study because of their antique handwriting and description of historical incidents, there are many copies and counterfeits written several centuries later. In this study, radiocarbon ages of Kohitsugire were measured by the AMS method.

On the Kohitsugire attributed to the famous calligraphists in the Kamakura period (Fujiwara no Sadaie and the Prince Munetaka), radiocarbon dating indicated that they were not genuine and should be excluded from the materials for study on the calligraphists.

Calibrated radiocarbon ages of the Kohitsugire attributed to Fujiwara no Yukinari indicated the middle Heian period. This calligraphy was written on Tobikumogami paper, which has billowing cloud pattern decorated with indigo blue dyed fiber. Although it was commonly accepted that the Tobikumogami is peculiar to the middle 11th– early 12th century, the results from radiocarbon dating also suggested that the origin of the Tobikumogami would date back to the last 10th or the early 11th century when Fujiwara no Yukinari flourished as a calligraphist.

The calibrated radiocarbon age of the Kohitsugire attributed to Nijo Tameuji and Reizei Tamesuke showed that they are fragments of old manuscripts describing lost tales, and were written in the 13th–14th century. Accordingly, radiocarbon dating clarified the existence of ancient tales which had been unknown, and indicated their worth as a material for the study of classical Japanese literature.